

---

# 高校内乱

波島祐一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校内乱

### 【Nコード】

N9680Q

### 【作者名】

波島祐一

### 【あらすじ】

治安の悪化した日本では、高校生で構成されるSDFと呼ばれる防衛組織が設立され、高校の治安維持と生徒の保護を担っていた。SDFの中でもエリート精鋭部隊であるSSTの隊員・緒方孝は、チームメイトの中原葵をはじめとする仲間たちと、勉強と訓練、そして戦闘に明け暮れる高校生活を送っている。銃犯罪に満ちた日本で、彼らは正義を貫くために戦う。

## 第一話：始業式（前書き）

この小説は「高校戦争」(<http://ncode.syosetu.com/n0275h/>)の続きです。

初見の方はまずそちらをご覧ください。

## 第一話：始業式

澄み切った青空のもと、緒方孝は通学路を歩き始めた。おがたかし

一億五千万キロメートルの彼方から降り注ぐ陽光は、肌寒い朝の冷気との相乗効果で物の輪郭を明瞭に見せている。この近辺に高層建築の類はなく、あるのは住宅や店舗、高くてもせいぜい五階建てのオフィスビルのみ。視線を遠くに伸ばせば、都市中心部の瀟洒なしょうしゃ摩天楼が霞に包まれてぼんやり見えた。

今日は春休み明けの始業式。孝は高校二年生になる。誰でもそうなのだろうが、孝も期待と不安の入り混じった気分だった。何となく気分が良く、新しいクラスは何組だろう、クラスメイトは誰だろうなどと、徒然に考えながら歩いていた。つれづれ

車一台通るのがやっとの狭い路地から大通りに出ると、学校の前を通る路線バスのライトグリーンの車体が孝を追い越して行った。新学期早々、超満員のすし詰め状態だ。このバスを見るたび、住んでいるマンションが学校の近くで良かったとつくづく思う。

「緒方！」

振り向くと、同じ学年の中原葵が小走りに近づいてきた。なかはらあおい「おはよ」

「おはよう。……なんか、いつもと雰囲気違うな」

孝は葵の顔をじつと見つめた。整った目鼻はいつも通りだが、髪が違った。背中まであった艶のある黒髪が、肩にしかかるくらいでカットされていた。

「ちょっと、切ってみた」

少し恥ずかしそうに目を逸らし、自分の髪を押さえる葵。その表情は、一年前より大人らしくなっている気がした。知らぬ間に見惚れていた孝は、慌てて視線を前に戻し、「似合ってるよ」と言っておいた。

「ありがとう」

葵は小さく言って、嬉しそうに笑った。

その後、坂丘高校に着いた二人は、校舎に隣接したSDF棟に入った。SDF棟は二階建てで、通常の校舎とは分離している。銃器が保管されているためセキュリティは通常の校舎とは一線を画しており、入るにはIDカードが必要だった。

廊下を進み、突き当たりにあるSST室のドアにIDカードをかざすと、自動でロックが解除された。中には渡瀬智久と三沢理香わたせともひさ みさわりががいた。二人は今日から三年だ。

「おはようございます」 孝と葵が同時に言った。

「おはよう」 渡瀬はそのままSST室を後にした。

「おはよー。お、新学期からツーショット登校ですかお二人さん？」  
悪戯っぽい笑みを浮かべた理香が、SST室で飼っている柴犬のテツを抱えたまま言った。

「そこで偶然会ったんですよ」 孝が言うと、葵も「……そうそう。たまたまです」 と調子を合わせる。

「隠さないでいいのに」 と葵の頬をつついた理香が葵と話始めたので、孝はSST室にある武器庫に入った。自分のラックからシグザウアーP226自動拳銃を取り、弱装弾が十五発込められた弾倉をP226のグリップに押しこむ。それと予備弾倉を二本、

三段階伸縮式の特種警棒を腰のホルスターに入れた。

武器の携帯は、校内の治安維持と生徒の保護を国から委託された存在であるSDF隊員のみに認められた、特別な権利だ。

孝と同じように装備を整えた葵と、生徒玄関に向かった。

生徒玄関はクラス分けの掲示を見に来た生徒でこつた返している。

なんとか掲示板の前まで行き、クラス名簿を見る。孝は苗字が緒方なので、自分の名前を探しやすい。案の定、すぐに見つかった。

「A組、か」

「緒方も？ あたしもA組」

「じゃあ一年間クラスメイトか。よろしく」

「うん、よろしくね」

「あ、葵！ また同じクラスだね」 孝の知らない女子が葵に話し掛けた。そのまま話し出したので、孝は一人で教室に向かう。

「よ、緒方」 同じ中学出身で、去年も同じクラスだった山

崎雄二が、A組の窓際に立っていた。その隣には、やはり去年同じクラスだった宗像杏子と内田美菜がいた。うなだみな「あ、緒方じゃん」「おはよう、緒方くん」

「おはよう……ってみんなA組？」

孝が驚くと、三人は頷いた。すると、教室に誰かが入ってきた。葵だった。

「緒方ー、黙って先に行かないでよ」 不満そうな表情の葵が

歩いて来た。そして三人に気づく。「えと、緒方のお友達？」

「ああ」

「あたし、中原葵っています。よろしく」　ぺこりと頭を下げる葵。三人もそれぞれ自己紹介をした。女子三人が趣味の話をしているとき、山崎が孝を肘でつついた。「おい」

「ん？」

「緒方、中原さんとどういう関係なんだよ？」

「どういう……って、同じSSTのチームメイトだけど。山崎、中原のこと知ってたのか？」

「知ってるも何も……中原さん、めっちゃ美人だから校内で有名なんだぜ？」

初耳だった。山崎はまだ何か言おうとしていたが、チャイムが鳴り、同時に新しい担任が教室に入ってきたので、生徒たちはそれぞれ席についた。

入学式と始業式が終わったあと、ホームルームで席替えを行った。結果、孝は窓側後ろから二番目という快適なポジションを得た。

が。

「……またおまえか」

前の席には山崎。実を言うと、去年も長い期間、山崎が孝の前の座席だったのだ。

「……縁があるのかもな、おれたち」

「気味の悪いことを言うな！」 孝は思わず怒鳴った。

今日は授業がなく、昼前に解散となった。

「お隣だね、緒方」

なぜか隣の席になった葵がこちらを見て笑った。純粹に嬉しそうな笑顔だった。

それを見てニヤけていた山崎の顔面に裏拳を叩き込んだのは、杏子。

「いつでええ！」 涙目で鼻を抑える山崎。「なにじやがる！」

鼻声だった。

杏子にはこやかに「ごめん、手が滑った」 と誤魔化した。

手が滑った……？ 手が滑って顔面に裏拳が直撃するのか……？

ひどい理由だ。確かに悪いのは山崎だが。

杏子は颯爽とポニーテールを揺らしながら、美菜と共に教室から出ていった。

「ちょっと待でふざげんな！」

鼻を真っ赤にした山崎が慌ててその後を追う背中を見て、葵がくすくす笑った。

「変わった人たちだね」



「文字通り変人だから、中原も気をつけた方がいい」  
「そうなの？」 葵は吹き出して笑った。

SDF隊員は午後に一年生の入隊式があるので、孝と葵は教室で昼食を食べ、多目的ホールに向かった。

「敬礼！」

ホールの全員が敬礼した。右手をこめかみに持つてくる、警察や軍隊でお馴染みの形式である。

ホールの中央で新品の制服を着ているのは、坂丘高校SDFの新入隊員二十三名。SDF隊員は一般の制服ではなく、SDFの制服を着用する規則となっている。白いシャツにネイビーのスラックス・ブレザーという基本は一般の生徒と同じだが、違うのはSDFのエンブレムと徽章、階級章がついていることで、ここにいる新入隊員は全員が最も下の三等学士。このあとの訓練で一等学士か二等学士に振り分けられ、その後は随時階級が上がる。

孝や葵は学曹長で、幹部である三等学尉の一步手前だった。二年生にもかかわらず階級が高いのは、少数精鋭のエリート部隊SSTの隊員だからで、SSTでなければ、幹部まで行けるのは小隊長など一握りだ。

「かわいいね、一年生」 校長が無駄に長い訓示をしているとき、孝の隣に整列している葵が言った。  
「ああ。……でも、一年前はおれたちもあそこにいたんだよな」  
「うん……一年って早いね」

などと呟き合っていると、入隊式は終わった。

孝と葵がSST室に戻るため廊下を歩いていると、「お姉ちゃん！」という声が背後で弾けた。駆け寄ってきた小柄な女子生徒に、葵は「あら、歩<sup>あゆみ</sup>」と返す。

歩と呼ばれた女子は身長が葵より少し小さいが、整った顔立ちが葵に似てなくもない。髪は長いツインテール。SDFの制服を着ていた。

「中原……妹？」

妹がいるとは聞いていたが、まさか同じ高

校に入ってくるとは。

「うん」

「似てるね」

「……そう？」

すると、歩は孝に不思議そうな視線を向ける。「……誰？」

「同級生の緒方孝くん」

葵が紹介してくれた。

歩は合点がいった、というふうに手を叩く。

「ああ、あなたが緒方さんでしたか。お姉ちゃんからよく話を……」

突如、葵が歩の口を手で塞いだ。「なんでもないの、気にしないで！」  
なぜか顔を紅潮させる葵。口ぶりからして、この妹は孝を知っているようだったが……。

歩は苦しそうに葵の手を口はら引き剥がす。「何すんの、お姉ちゃん……！」

孝は歩が何を言おうとしたのか気になった。

「えっと……歩ちゃん？ さっきなんて……」

「きくなバカ！」 顔の赤い葵が怒鳴った。珍しい。

そのとき、廊下の奥で女子生徒が歩を呼んだ。

「じゃあ、あたしはこれで……」 歩は屈託のない笑顔で孝に

向けた。「お姉ちゃんのことよろしくお願いしますね。……いろんな意味で」

「え？」

意味深な言葉を残し、歩は廊下の奥へと駆けて行った。葵と歩は性格が少し違うようだ。

孝は隣で俯き肩を震わせている葵を見た。顔は髪のせいでよく見えなかった。

「……妹におれのこと何て言ったの？」

「教えてあげてもいいけど……」 そう言ってこちらを見返した葵は、ぞっとするほど優しい笑みを浮かべていた。

「ただし、聞いたあと記憶を消させてね？」

葵の右手は腰のホルスターに収まったP226のグリップを握っていた。

記憶って銃で消せるのか……！？

「……やっぱいいです」

「よろしい」

葵はグリップから手を離し、機嫌良さに鼻歌を歌いながら、SST室に向かって歩いて行った。

退屈しない日々が始まりそうだと孝は心中に呟いた。

## 第一話：始業式（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

ご意見・ご感想お待ちしております。

SDF、SSTなど用語の詳細は前作「高校戦争（<http://ncode.syosetu.com/n0275h/>）」の方を参照ください。

## 第二話：戦闘

SDFの隊員は、戦闘職種と事務職種に分かれている。前者は暴動の鎮圧や侵入者の排除などを担当し、後者は警備ローテーションの作成などデスクワークを担当する。

事務職種の仕事のひとつとして、監視業務がある。始業式の翌日。

今は三限目の半ばだが、監視業務に就いている二年生の女子生徒二人は、SDF棟の監視室で談笑していた。

突然、警報が鳴り響く。二人がモニターに映し出された監視カメラの映像を見ると、数人の男が生徒玄関の抗弾ガラスを銃で破壊しようとしていた。他にも十人ほどいる。

一人が慌ててマイクをとり、全校放送のスイッチを入れた。

侵入者発見の放送を受けたSDF隊員がSDF棟に集合した。一年生の新人はまだ戦力にならないので、二年と三年だけだ。

SST室では、八人の隊員が装備を身につけていた。

すでに黒い戦闘服に着替え、ボディアーマーをつけた岡田清二が隣の渡瀬に問う。

「メインはM4の方がいいか？」

「短機関銃で武装しているらしいからな、そうしよう」

ヘルメットをつけた渡瀬は武器庫に入った。

ラックから自分のM4A1自動小銃を取り出し、五・五六

ミリ弱装弾が三十発入った弾倉を入れてチャージングハンドルを引く。金属音が響いて初弾がチャンバーに送られた。

「ブラボーが現場に向かう。アルファは待機だ」      ブラボーチーム班長の渡瀬が告げ、孝たちブラボーチームはM4を携えてSST室を出た。

生徒玄関では、「銃を捨てなさい！」と怒声が響いていた。常時警備の隊員だろう、二人のSDF隊員が抗弾ガラスの向こうにいるヤンキー風の男たちと対峙している。

二人が構えるMP5短機関銃に臆せず、男たちは銃を抗弾ガラスに向けて発砲し続ける。

そして、耐えきれなくなった抗弾ガラスが音を立てて割れた。一瞬、身を引いた二人のSDF隊員は、正面に立った大柄な男たちに蹴り飛ばされて後方に弾けた。

男たちは、ロッカーにぶつかって倒れた二人に各々の銃を突きつけた。

四発の銃声が響き、二発ずつをボディーマーに撃ち込まれた二人はあまりの痛みに呻き声を上げる。ボディーマー越しで、弱装弾であっても、至近距離で撃たれれば骨くらいは簡単に折れる。

「やっぱSDFなんて大したことねえな」      大柄な男が言った。周りの男たちは笑う。

ちようどそこに、五人のSST隊員と十三人の普通隊員が駆けつけた。

それに向けて、男の一人がステアーTMP短機関銃を連射する。暴力的な発砲音と共に、輝く空莖莖が床に撒き散らされた。

突然の発砲に、隊員たちは慌ててロッカーの陰に退避した。

「逃げないで学生ちゃん」 気味の悪い声で言った男がさらにTMPを撃った。数発が、生徒の私物などが入ったロッカーに命中する。

そのロッカーの陰で、佐伯が呟くように言った。

「あれは……ヤクザか暴力団の腕試し部隊かな」

「だろうな」 と渡瀬。「よし、緒方と中原は連中の横に回り込め」

「了解」 孝は葵と廊下を走って移動した。

腕試し部隊。自分たちの戦闘力を試すため、あるいは銃の乱射を愉しむため、わざわざ高校にやって来てSDFと戦火を交える大人たち。高校生や教師にとっては至極迷惑な連中である。

「連中のサブマシンガンが弾切れになったら行くぞ」

渡瀬と佐伯はM4のセクターレバーをセミオートに切り替えた。その近くでMP5を構える普通隊員たちも、射撃用意を整える。

『緒方、準備はいいか？』

骨伝導式イヤホンから渡瀬の声が

「いつでも」



孝と葵は生徒玄関の隅で、こちらには気づいていない男たちに向けてM4の射撃姿勢をとった。ドットサイトを覗き、赤い点を男の足に重ねる。

『よし、五秒後にF弾投擲』

F弾は音響閃光手榴弾で、敵の目と耳を一時的に潰すことができる。SDF隊員たちは耳栓を確認した。

直後、凄まじい音と光が男たちを襲った。「うあっ!？」

孝はM4のトリガーを引いた。肩に反動が伝わり、ドットサイト越しに見ていた男の足から鮮血が散る。他の男たちも同様の運命を辿った。

駆け寄り、手当たり次第に倒れた男たちの持つ銃を蹴り飛ばしていく。

全員に手錠をかけ終わった頃、パトカーと救急車が到着した。

その後、SDF隊員が総出で割れたガラス片の始末を行った。ちょうど昼休みが始まった頃に後始末が終わり、隊員たちは自分の教室に戻っていった。

正午過ぎ、二年A組の教室では、昨日の五人が昼食をとっていた。

「そう言えば山崎、あんたSDFの試験受けたんじゃないっけ？」  
と杏子。

「受けたよ。……普通に落ちたけど」  
山崎はメロンパンにか

じりつく。

「……やっぱりね」

「やっぱりって酷くないか!？」

杏子は叫んだ山崎を無視し、お茶のペットボトルをぐいと呷った。いつもの光景なので、孝は平然とした顔でミートスパゲティを口に運ぶ。葵は美菜と顔を見合わせて苦笑していた。

「……にしても、中原さんって人気よねえ」

一同がきょとんとしたので、杏子は教室の入り口を目で示した。そちらを見ると、数人の男子生徒が廊下からこちらを見ていた。五人がそちらを見ると、彼らはあらぬ方向に視線を逸らす。全員、俗にいう美形の生徒だった。

「さっきからこっち見てる。中原さん目当てなんでしょうね」

「そんなことないよ」      と葵は苦笑した。

「でも中原さん、この前うちの学校で一番かつこいって言われているサッカー部の先輩に告白されたんだよね」

山崎の言葉に、孝は口に含んだ牛乳を吹き出しそうになった。全く知らなかった。

「何で山崎くん知ってるの!？」      葵が驚いていた。

「もう噂で結構広まつてるよ？」      と杏子。

「で、どうなったの？」      山崎が身を机に乗り出す。

孝は動揺を隠すためにミートスパゲティの残りを一気に詰め込んだ。

「断ったよ」

「何で!？」　あの先輩性格も良いつて評判なのに!」　杏子

は口角沫あわを飛ばす勢いだ。

「どうして断ったの？」　山崎も意外そうだった。

「うーん、……内緒。」

あ、緒方ミートソースついてる」

葵はポケットティッシュを一枚取り出した。渡してくれるのかと思いきや、葵はそのまま孝の口を拭いた。

顔が近い。孝は硬直する。

「これでよし」　葵は平然としている。

「……顔赤いわね、緒方」

そう言った杏子の顔がニヤリとしていたので、孝は「気のせいだ、自販機行ってくる」と返し、席を立て足早に教室から出た。

廊下から教室内を見ていた男子生徒の視線が刺さったが、無視して自販機に向かった。

### 第三話：前兆

五月一日。

七限目の現代社会が終わり、孝は鞆に教科書やノートを入れた。鞆は学校指定ではないため、生徒は各々の嗜好に合わせて選んでいる。孝は黒いトートバッグを愛用していた。アメリカ製で、素材は防弾チョッキにも使われるバリステックナイロン。少々値は張るが、実用一途、耐久性の高いバッグだった。容量も申し分なく、教科書やノート、夜間警備のための着替えなども入る。

「緒方、今日の警備って何時からだっけ？」

隣の席で、鞆を抱えた葵が問う。孝と葵はバディなので、警備のローテーションは全く同じだった。

二人一組のバディシステムは、全国のSDFで採用されている。普通部隊のバディはローテーションで組み替えるが、少数精鋭のSSTでは、バディは固定されている。

「八時からだったと思う」

「それまで、予定ある？」

八時までは四時間ある。孝は家に帰って適当に時間を潰すつもりだったので、「ないよ」と答えた。

「じゃあ、ちょっと付き合っほしいんだけど……。あたし掃除当番だから、先にSST室で待ってて」

「ああ」

葵は鞆を持って小走りに教室から出て行った。A組の掃除

当番は、確か職員室の係のはず。

掃除当番でない孝は、足早に教室を出た。

SDF棟に併設された射撃場で、葵は伏せ撃ちの姿勢でレ  
ミントンM24 SWS狙撃銃を構えていた。その隣で、片膝を床  
につけた孝は双眼鏡を覗く。

跳弾による被害防止のため、射撃場は側面、天井ともに分  
厚いコンクリートで囲まれている。

「修正、左二、下一」

「了解」

孝の指示で、葵はM24に載っているライフルスコープの  
ダイヤルをわずかに回す。

そして、射撃を再開する。的は七十メートル先にある、同  
心円状に白線の入ったスチールプレート。

ちなみに隣の五十メートルレンジでは、新入隊員たちがM  
P5短機関銃の射撃訓練をしている。普通部隊のMP5は、ポピュ  
ラーなA5モデルで、衝撃弾を使う。ちなみにSSTには、衝撃弾  
より強い弱装弾を用いる、銃身を切り詰めたMP5クルツが配備さ  
れてもいる。

鋭い銃声と共に、プレートの中心点に着弾の火花が散った。  
SST専用の弱装弾では貫通こそしないが、的が凹む。定期的な交  
換は必須だ。

「……誤差なし。OK」

「はい」

葵は立ち上がると、チェンバーに残った七・六二ミリ弾を抜いてケースに戻した。「ごめんね、付き合わせちゃって」

「別にいいよ。バディなんだし」

「……うん」

「あ、お姉ちゃん」

横を見ると、紺色の戦闘服に半長靴を履き、MP5を抱えた歩が立っていた。

美少女に戦闘服。

葵でもそうだが、ツインテールの歩だとさらにシユールな様相だった。

時代が生んだ光景……というのは仰々しいが、SDF法施行前ならコスプレにしか見えない。

歩は孝に軽く会釈する。「こんにちは」

「お姉ちゃん、緒方さんと二人で訓練してたんだ」

「銃の照準を合わせてただけよ」

「……二人で、でしょ？」

「何が言いたいっ！」

葵が怒鳴ると、歩は舌を出して奥のレンジに走っていった。茶化す妹と、怒る姉。これはこれで均整のとれた姉妹の姿なのかもしれないと、孝は一人で納得した。

SST室の武器庫に銃を戻すと、午後六時を少し回ってい

た。葵は歩に射撃を教えると言って射撃場に残っているので、孝はSST室のソファに腰掛け、勉強を始める。

孝の苦手ーというほどではないが、他の教科に比べると点が低いー教科である古文の文法書を開く。孝は国語よりも数学が得意だった。答えがきつちり一つに決まるからだ。ちなみに、孝の所属するA組は理系のクラスである。

気がつくと、柴犬のテツが足元で寝ていた。孝はその手触りの良い頭をひと撫でして立ち上がる。掛け時計を見ると、もう七時過ぎだった。

「晩飯買いに行くか……」

今日は泊まり込みの夜間警備なので、夕食を摂っておかなければならない。夜食も買っておきたい。近くのコンビニにでも行こうと思ってSST室を出ると、廊下に葵がいた。隣には歩。銃を手にする二人は、射撃場から戻ってきたところらしい。

「あ、緒方さん晩御飯今からですか？」

「うん」

「じゃ、三人で食べに行きませんか？」

「ちょ、ちよつと歩！」 と驚く葵。

「おれはいいけど……」

「決まりですね。着替えて来るんでちよつと待ってて下さい。お姉ちゃんも待っててね」

そう言うと、戦闘服の小柄な体躯が更衣室に駆けて行った。

その後、三人で学校近くのファミレスに入って夕食を食べた。歩が葵のことをペラペラ喋るので、孝は面白かった。実は雷が怖い、家では完全に天然、抱き枕がないと安眠できない、など。言われる度に葵は赤面していたが。

歩は帰宅するので、ファミレスの前で別れた。学校に戻ると、八時前だった。

警備の引き継ぎを終え、夜間警備が始まった。八時から朝の六時まで、交代で一時間おきに巡回を行う。睡眠時間は三時間、自由時間は一時間、残りは待機と巡回。育ち盛り的高校生には辛いタイムスケジュールだが、仕事なので仕方がない。

こういった夜間警備が、週に二度か三度割り当てられる。学校に残るのはSST隊員が四人と、普通隊員が六人となっていた。

SST室では、孝と葵、理香の三人で人生ゲームをしていた。理香のバディである三年の結城<sup>ゆづき</sup>は、銃のメンテナンスをすると行って工具室に籠っている。結城は葵と同じくSST狙撃過程を修了しており、狙撃の腕は全国のSDF隊員でトップ五に入ると言われている。トップ二十の葵でも天才的な腕前だが、彼はそのさらに上を行っていた。

「あ、破産しちゃった」

理香が顔をしかめた。

「借金ばかりするからですよ」

と言いつつ、孝はルーレット



を回して自動車を模したコマを進める。

「《某国のゲリラ部隊に襲撃され、車と財布を失う。所持金の八割を銀行に戻し、二十コマ戻る》……って何だよこの人生ゲーム！」

「……独創的だね」

「もう止めましょ。あなたたち、もうすぐ巡回よね」

孝は午後九時の時刻を壁掛け時計に確認し、「そうですね」と返した。

三人は人生ゲームを手際よく片付けた。

孝と葵は、MP5クルツ短機関銃を持って巡回に出た。クルツの弾倉には九ミリ弱装弾が装填されている。

巡回中でも照明はほとんど点けない。わずかな避難誘導灯だけだが、巡回に支障がない程度には照らされている。

「そつえば、来週遠足だよね」

廊下を歩いていると、葵が口を開いた。

「海浜公園だっけ？」

「うん、バーベキューするみたい」

微笑みながら話す葵の声は、いつもより弾んで聞こえた。楽しみなのだろう。だが孝は単純に喜べない。このご時世、校外活動にはリスクが伴う。遠足や修学旅行中に事件に巻き込まれるのは日常茶飯事だった。そういった行事の場合は、学校敷地外でもSD

F隊員の銃器携帯が許可されている。

突然、葵が立ち止まった。「ねえ緒方……」

「ん？」

「なにこれ？」

葵が指差したのは、近くの自販機のそばに置かれた紙袋だった。海外の某高級洋服ブランドのロゴが入ったそれは、場違いという印象を二人に与えた。

「なんか、黒い箱みたいなの入ってる」

黒い箱？ 孝もその紙袋を覗いた。

その瞬間、時間が停止したように感じた。

プラスチック製の箱から赤や青のコードが出て、年季の入った旧式の携帯電話に繋がっている。

これは、爆弾だ。

孝は直感でそう断じた。

携帯がついているからにはタイマー式ではなく、遠隔操作

式。

とすると、誰かがこちらを見ている？

一瞬の思考だった。

孝は葵の手を引いて階段に駆けた。

直後、背後で着信音が響き、

膨れ上がった爆音と爆風が背中を蹴り飛ばし、

二人は階段を転げ落ちた。

SST室のソファで仮眠をとっていた理香は、突如発した爆音に飛び起きた。

「なにこと!？」

思わず辺りを見回すと、結城が工具室から駆け戻ってきた。彼は手に持っていたM24を武器庫に放り、代わりにM4を取ってきた。「三沢、さっさと行くぞ!」

「ど、どこに?」

混乱している理香の声に、結城は端正な顔をわずかに歪めた。

「校舎で爆発だ!」

結城はボディアーマーも抗弾ヘルメットも身につけず、SST室を飛び出した。

腕と足が少し痛む。

火災警報のベルが耳朶<sup>じだ</sup>を打っていた。

瞼を開けると、孝は自分が階段の踊り場にいることに気づいた。薄闇の踊り場に、葵も倒れている。

足音が迫り、白い閃光が踊り場を照らした。

「無事か!？」

M4のフラッシュライトを点灯させた結城が駆け寄ってきた。

孝は立ち上がり、自分の四肢が全てついていることを確かめた。「なんとか……」

葵も起き上がる。「いったい何なの……」

「なにがあつた？」

「自販機の横に置いてあつた紙袋に、爆弾が入ってたんです」

「……なら、事故ではないな」

結城が眉間に皺を寄せた直後、理香がやってきた。「大丈夫!？」

「軽い打撲だけですよ」

孝是自販機の所に戻った。

紙袋は跡形もなく消え、付近の窓が全て割れていた。抗弾ガラスにも関わらず。

自販機は横倒しになっており、歪んで内部が露出していた。廊下の壁もところどころ抉れている。

横に立った三人も絶句した。

あと少し遅ければ、死んでいた。

孝は心胆寒からしめられた思いで、その場に立ち尽くした。割れた窓から、夜風とサイレン音が流れ込んでいた。

#### 第四話：助言（前書き）

はじめに、更新が大幅に遅れてしまったことをお詫びします。  
やむを得ない事情でしたが、更新が滞る旨の連絡をすべきだったと  
反省しております。

#### 第四話：助言

五月二日、午前十一時。渡瀬は、理香と佐伯、結城の四人で高校近くの市立病院に来ていた。

坂丘高校は臨時休校となり、現在警察が実況見分を行っているが、念のため、SDF隊員は交代で校舎の警備に就いている。

SDF隊員は、しばしば誰かの恨みを買う。それは戦闘で負傷したFDT隊員や、巻き添えを受けた一般生徒、あるいは彼らの家族などと、多岐に渡る。恨みを買えば、報復を受ける。最悪の場合、それは殺害という形で果たされることもある。

だが今回のように、プラスチック爆薬で爆殺（未遂ではあるが）というのは前例がない。警察は捜査本部を立ち上げ、早速犯人の特定を始めているらしい。

数分前、病室で緒方と中原に面会したが、二人とも打撲や捻挫程度で済んだので、精密検査の結果が出ればすぐにでも退院できることだった。四人はとりあえず安堵あんどの息をついて、病室をあとにしたのだった。

もう、仲間が死ぬのを見たくない。これは皆に共通した気持ちだろう、と渡瀬は思う。

一階に降りて廊下を歩いているとき、渡瀬は珍しく無口な理香に気づいた。「どうした？」

「どうしたって……。二人が殺されそうになったのよ？　今回はたまたま助かったけど、また爆弾が仕掛けられたら……。」「理香は悲痛な表情をしている。

「犯人なら、すぐ逮捕されるはずだ」

「だろうな」　結城が相槌を打った。

「なんで？」

「考えてもみる。プラスチック爆弾なんて素人が扱えるわけないだ

る？ 坂丘高校 SDF に恨みを持ってそんな人間をリストアップして、プラスチック爆薬を入手・使用できそうな奴を絞り込めば、一発さ」

渡瀬が説明したが、理香は訝しげに唸る。「でも、そんな簡単にバレルなら、最初から爆弾なんて使わないんじゃない？」

「衝動的な犯行……てことだろう」

冷静な結城が言うと妙に説得力を感じるが、それでも理香は納得できなかった。

限りなくゼロに近いが、渡瀬は考え得る他の可能性を口にしていった。

「まあ、テログループみたいな連中の犯行なら、捜査は難航するだろうな」

「それは難儀だな」 黙っていた佐伯が苦笑まじりに言う。テログループが、いち高校の SDF 隊員の命を狙う道理はない。

犯人が誰であれ、検挙するのは警察の仕事だ。SDF の警察権が原則として学校敷地内に限定されている以上、今回の事件について渡瀬たちにできることはほとんど無い。

病院のエントランスから外に出ると、四人の前に一人の女が立っていた。

長い髪を後ろで一本にまとめ、切れ長の目で四人の顔を見比べる。年齢は、二十代後半くらいだろうか。誰だ？ 渡瀬が当然の疑問を口にしようとする、女はそれを封じるかのようなタイミングで「はじめまして、坂丘署の水橋と言います」

女 水橋美希<sup>みき</sup>巡査部長は、警察手帳を掲げて名乗った。現行の二つ折り警察手帳は、手帳というより身分証と表現する方が正しい

か。写真の部分に印刷された旭日章のホログラムを確認して、それが本物だと判断した渡瀬は、「で、おれたちに何か？」と尋ねた。

「少し、話したいことがあるのだけど……」 美希は事務的な微笑を浮かべたまま、渡瀬を見た。「来てもらっていいかな？」

部外者には聞かれたくない話、か。私服刑事がおれに、いったい何の話だ？

脳に沸き上がる疑問符を押し殺し、渡瀬は三人に先に戻るよう言っていた。

美希がハンドルを握るマツダRX-8は、警察車両ではなく、彼女の私有車らしい。

走り出して早々、助手席の渡瀬は口を開いた。「それで、話というのは？」

「昨夜の爆発事件についてのことよ」

予想通りの回答だったので、渡瀬は驚かない。「……続きを」

「まず、犯人が判明したわ。建設会社勤務の、みぞかわゆうじ溝川雄治って男で、父子家庭の父よ。彼の一人息子は去年、FDTの一員として坂丘高校を襲撃した際、SDF隊員に撃たれて出血多量で死亡」

つまり、息子の復讐のために、爆弾を仕掛けたということか。建設会社に勤めていれば、役職によっては爆薬が手に入るし、扱いも



慣れているだろう。

国道に入り、RX-8がスピードを増す。渡瀬は軽い加速度を知覚した。

「溝川は今朝、自宅で死んでいたわ」

SDFに復讐しようとして、罪悪感に苛まれて自殺。これまで何度も発生しているケースだ。

「問題は、ふたつある」

渡瀬は、ちらと美希を見遣った。彼女は正面を見据えたまま言葉を繋ぐ。

「ひとつ目。溝川は昨日、会社から四トンのプラスチック爆薬を盗み出した」

「四トン!？」

渡瀬は思わず大声を出した。昨日使われた爆薬は、せいぜい数キログラム。対人殺傷ならその程度で充分だ。

四トンもの爆薬、いったい何に使うつもりで……？

「ふたつ目。溝川は自殺でなく、殺されていたということ。盗まれた爆薬は、所在不明になっているわ」

「それは、つまり……」

「何者か」が、溝川を利用して大量の爆薬を入手したってこと」

渡瀬は軽い目眩を覚えた。四トンものプラスチック爆薬の使い道なんて、テロくらいしか思い浮かばない。

誰が、何のために？

この刑事がそのことをわざわざおれに話した理由は？  
そもそもこれは、SDFに関係のある話なのか？

渡瀬は飽和状態の情報を強制的に整理し、いま最も知りたいことを問うた。

「……なぜそんなことを、おれに？」

「いま私が話したことは、パニック防止のため一般には公表されないわ。無論、あなたたちSDF隊員にもね。

爆薬を入手した”何者か”が、あなたたちSDFに敵意を持っているとは限らないわ。ただ、警察官としていろいろ調べていると、最近のFDTには不可思議な所があるのよ。これは勘だけど、何か、水面下で恐ろしいことを始めているような……。

だから、あなたたちには、最大限の注意を払ってほしい。私が言いたかったのはそれだけ」

RX - 8は、いつのまにか坂丘高校の校門前に到着していた。

「これは……なんて言うのかな、元<sup>OG</sup>SSTとしての助言よ<sup>アドバイス</sup>」

渡瀬は礼を述べて、RX - 8から降りた。

昨夜の爆発で割れた窓を一瞥してから、SDF棟に向けて歩き出す。

四トンの爆薬の矛先が、SDFに向いているのだとしたら  
その矛を、へし折ってやるまでだ。

その三日後、坂丘高校は授業を再開し、孝と葵はSSTに復帰した。

## 第五話：簞城

『泥酔した大学生の兄、中学生の妹を射殺』

『中央公園で不良グループが銃撃戦 十六人死傷』

『高校生コンビ二強盗 店員を射殺』

『痴漢、OLに撃たれ全治三ヶ月 正当防衛か』

『高校生が同級生五人を射殺 原因はいじめの恨み』

大手ポータルサイトのニュース欄を席卷<sup>せつけん</sup>する、銃器に関連した事件。似たような事件は過去に何度も起きており、わざわざ詳細を確認する気も起きない。この国が治安国家と評されていたのは、とくに昔の話だ。銃大国となった日本に辟易<sup>へきえき</sup>しながらも、そこで生きてゆくしかない現状を再確認した孝は、もはや異常とは呼べなくなった異常の数々を表示するパソコンの液晶画面から視線を逸らした。

娯楽用として、SST室に一台のみ設置されているデスクトップパソコンは、機械関係に造詣<sup>さうき</sup>が深い佐伯がパーツから自作した代物だった。ディスプレイから無数の配線が伸び、電源ユニットやらHDDに剥き出しで接続されている外見は不格好としか言いようがないが、パソコンとしての性能はかなり良いようで、ゲームソフトや動画ファイルが大量にインストールされているにも関わらず、ブラウザの表示はロスタイムがほとんどない。実用上唯一の欠点と言えば、ユニット全体が放出する熱が多いことで 孝は一度パソコンをスリープ状態にし、パソコンデスクから離れた。

午後十時十七分の時刻を壁掛け時計に確かめ、二人掛けの革製ソファに腰を沈めると、どっと眠気が押し寄せてきた。

携帯電話をテーブルに置き、足元に寄ってきた柴犬のテツの頭をひと撫<sup>な</sup>でしてから、瞼<sup>まぶた</sup>を閉じる。

疲れているのだろう。孝は自分のコンディションについて、そう

判断した。

爆弾事件のあと、二つ離れた市に住んでいる両親と祖父母が見舞いにきた。当然と言えば当然かもしれないが、孝はSDFを辞めるよう懇願された。兄が死に、唯一の息子となっている孝が死にかけたのだから、両親と祖父母の言葉にこれまでにない熱がこもっていたのは納得できる。

だからこそ、孝が両親たちを説得するのは困難で、心身ともに想像以上の負担を強いられたのだ。

なぜ、そこまでして戦う？ もう一人の自分が訊いてくる。

金のため、ではない。それは断言できる。確かにSDF隊員としての収入は役に立っているが、仕送りだけでも生活には不自由しない。それに、安全なアルバイトなら他にいくらでもある。

では、なぜだ？

銃が氾濫する浮き世に対する正義感？

兄さんの敵討ち？

それとも

「ふう、やっと終わった」

ドアを開く音と共に発した声が、孝の意識を現実に戻した。聞き慣れた相棒<sup>バディ</sup>の声。孝はゆっくりと目を開いた。

左肩と左胸にSDF章が縫い込まれたセーラー服に身を包んだ葵は、銃のメンテナンスを終えたらしい。武器庫のドアの前から孝の方に歩いてきた。そのままソファの後ろに立つと、孝の顔を覗き込むようにしてくる。

「お疲れなのかな？ 緒方くんは」

多少おどけて言った葵に、孝は「……よく分かるな」と気の抜けた返事をした。頭がぼんやりしていた。

葵はふふと笑う。「だてにバディやってませんから」

「なるほど」 孝も笑った。自然に笑えたのは数日ぶりだと思う。

葵はSST室の角に置かれたメタルラックに向かい、コーヒーカップふたつを取り出し、インスタントコーヒーを入れ、ポットの湯を注いだ。孝の隣に腰掛け、片方のカップを孝の前に置く。「まあ、コーヒーでも飲みなよ」

「ありがとう」 言ってから、孝はコーヒーを一口啜<sup>すす</sup>った。ほどよい苦みが口に広がる。「中原」

「うん？」

「親に、なんて言われた？」 爆弾事件のことだということは、暗黙のうちに通じるだろう。

「辞める、ってさ」 葵は、両手で握ったコーヒーカップに視線を落とした。「緒方の方は？」

「同じく」

「……辞めないよね？」 数秒の沈黙を挟んで、葵は問うた。

孝は微笑を浮かべる。「もちろん」

爆弾事件のあと、数人のSDF隊員が辞職していた。この前代未聞の事件に、坂丘高校だけでなく、全国の高校のSDFでも辞表を書く隊員が出ているという。幸いSSTから辞職者は出なかったが、SDF隊員を殺害する目的の事件が起きたのだから、辞める者が出るのは不思議ではない。むしろ賢明と言ってもいいくらいだ。

成人すらしていない子供が、大人のエゴのせいで命を落とすなんて、虚<sup>むな</sup>しすぎる。

葵は真剣な表情を少しだけ崩し、僅かな笑みを浮かべた。「よかった」

「あたしも、辞めない」

そう言った葵の瞳は、堅い意思の色を宿しているように見えた。だが、その言葉に孝は手放して喜べなかった。

おれは、葵に辞めてほしいと思っっているのか？

なぜ。バディに辞められたら困るのはおれじゃないか。

葵がSDF隊員として危険に身を晒さらしていることが、嫌なのか？

唐突にSST室に響いた警報音が、孝の思考を終わらせた。

侵入者。

反射的に、壁につけられたモニターに目をやった。学校に多数設置された監視カメラのひとつの映像が映っており、ひとつの人影が校舎の周りを走りながら、侵入する場所を探しているようだった。

動きからして、相当焦っているらしい。見える限り、銃も持っていない。

二人は、戦闘服とボディーマー、鉄帽テッパチに身を包み、MP5Kクルツサブマシンガンを携えてSST室を出た。

SDF棟から出て、月明かりのもと、校舎とグラウンドの間を進む。

アサルトライフル突撃銃でもない限り、抗弾ガラスを備える校舎に侵入するのは不可能だ。

侵入者は、あっさりと見つかった。一階にある教室の窓を割ろうと、コンクリートブロックを振りかぶっていた。

「SDFだ！ 動くな！」 孝はクルツを即時射撃位置で構え、怒鳴った。

フラッシュライトに照らされた侵入者はパーカーにジーパンという出で立ちの少年だった。中学生かもしれない。顔には、切り傷や青あざがいくつか見える。

逃げようとすれば威嚇射撃するつもりだったが、少年はコンクリートブロックを放り捨て、「た、助けて下さい！」と泣きそうな声で喚き、駆け寄ってきた。まるでなにかから逃げているようだ。

「止まれ！ 両手を挙げる！」

クルツの銃口に気づいて少年は足を止め、大げさに両手を挙げた。葵が警戒するなか、孝は少年が武器を持っていないかチェックした。パーカーのポケットから、バタフライナイフが出てきたので没収する。

ボディチェックが済むと、葵はようやくクルツの銃口を下ろす。

「助けて、ってどういうこと？」 葵が少年に訊く。

「ぼ、暴力団に追われてるんです。すぐそこまで来てるはずですよ！」

少年が言った直後、SDF棟の方から複数の足音が響いてきた。警報を聞いて駆けつけたSDF隊員ではないようだ。

裏口から侵入したのだろう。十人ほどの男が走ってくるのが見えた。手には拳銃らしい物体が握られている。「いたぞ！」「逃がすな！」

相手が多すぎる。正面玄関の方に向かおうと考えたが、そちらからも武装した集団が近づいてきていた。

暴力団の挟み撃ち。孝は舌打ちする。

とにかく校舎に入るため、孝は「非常口から入るぞ！」と言って走り出す。

三人は校舎と体育館の間に入った。そこに非常階段の出口がある。暴力団の数人が発砲してきた。照準はでたらめ。

葵が解錠を始める。

孝は応射のトリガーを引いた。

フルオートで吐き出された九ミリ弱装弾が、接近しつつあった暴

力団員の足元のアスファルトを抉り飛ばす。その団員が慌てて後退するのを横目に、別の方向にも威嚇射撃。

「緒方、早く！」

振り返ると、葵が非常口のドアを開けて待っていた。少年はすでに校舎に入っただけ。孝は最後の掃射で弾倉<sup>マガジン</sup>を空にして、非常口に駆け込んだ。

非常ドアもそれなり以上に頑丈に作られているが、大量の銃弾に持ちこたえられる保証はない。小銃弾でもびくともしないドアを作ることも可能だが、非常時の消火・救難活動に支障が出るため法律上禁止されている。

「ここだ！」「早くぶち壊せ！」「鍵だ、鍵を撃て！」 ドアの外から怒号と銃声が響いてきた。

三人は階段を駆け上がり、最上階の五階まで上った。

本来、学校敷地内への不法侵入者は警告したのち、従わなければ逮捕するが、今回は銃で武装しているし、数が多すぎる。対してこちらは夜間警備の人数しかない。警察の協力が必要かもしれない。まずは、自分たちの安全を確保しなければ。廊下を歩きつつ、孝は籠城に適した場所を考える。

「緒方と葵、聞こえる？」

突然イヤホンを震わせた理香の声に、葵は「聞こえます！」と返した。孝たちと同じく夜間警備に就いている理香と結城は仮眠時間中だが、先刻の警報と銃声で起きたのだろう。

「外は随分と賑やかみたいだけど、状況は？」



「外にいる暴力団から少年ひとりを保護。校舎に侵入されそうなので、これから五階に籠城します」 孝はなるべく簡潔に答える。

『了解。いまSDF棟には、わたしと結城、普通部隊の六人がいるわ。校舎内に巡回中の隊員はなし。渡り廊下に武装した連中がいて、そちらに行く場合は戦闘になるわね』

「連中の武器は拳銃がほとんどですが、人数が多い。強行突破も視野に入れといて下さい」

『そうね。でもとりあえずは情報収集を優先させるわ』

「分かりました」

通信が終わり、とりあえず理科実験準備室に入った。理科実験室の隣にあるこの小さな部屋は、理科系の実験器具を置いておく場所だ。孝はカーテンを閉めて外と廊下に光が漏れないようにしたあと、照明をつけた。

棚には薬品やビーカーが並び、他にも顕微鏡や試験管が所狭しと置いてあった。古びた人体模型が不気味だ。化学薬品の臭いが鼻につくが、もつとも籠城に適しているのはここだから仕方ない。三人は、室内にあった簡素な丸椅子に腰掛けた。

「さて、説明してもらえるかな？」

孝は少年に訊いた。当然の質問だった。

少年は数秒間経ってから、視線を下げたまま口を開いた。

「嫌になったんです」 少年の声は、わずかに震えていた。「おれは、あの暴力団の下っ端です。でも、抜け出てきたんです」

少年は語り出した。名前は栗野浩太郎くりのこうたろう。この前高校生になったばかりだが（坂丘高校の生徒ではない）、親の暴行に耐えかねて家を出た。持ち出した現金は数日で使い果たし、放浪していたところを

暴力団 青豹<sup>あおひょう</sup>というらしい に助けられた。『仲間になれば、居場所と力を与えてやる』と。

「でも、あいつら、平気で罪のない人を殺すんです。犯罪現場を見られた、という理由で。ひどいときは、憂さ晴らしで撃ち殺すような人もいます」

民間に銃が流通して以来、その手の事件が途絶えたことはない。おかげで、人員を三割増しした警察でさえ手に負えなくなっている。人員・装備が拡充された機動隊や銃器対策部隊、特殊<sup>S</sup>犯<sup>A</sup>捜査<sup>T</sup>係、特殊<sup>S</sup>急襲<sup>A</sup>部隊は年中出勤がかかっているという。そんな警察に余裕はない。だからこそ、孝たちSDFが存在しているのだが。

「それで、耐え切れなくなつて逃げ出したんです。脱走者は射殺されるんで、保険として人事データを盗んできました」

「そりゃ逆効果だろ」

「へ？」 孝のツツコミに、得意げな顔だった栗野は間抜けな声を出す。

「きみがそんなデータを盗んできたから、青豹はあんな大人数で追いつてるんだよ？」 葵が分かりやすく説明する。「おかげで、あたしたちがその相手をしなくちゃいけない」

「すみません……。本当は一人で逃げ切るつもりだったんですけど、途中で追いつかれて、たまたまこの高校があつたものですから」

「SDFは警察じゃないぞ」 孝は呆れ顔だった。

「でも、高校生を守るのが仕事でしょう？」

なにかずれている気がするが、その通りなので、返答に困る。孝は顔をしかめ、ため息をついた。そして、栗野から没収したバタフライナイフをポケットから出して掲げた。「なんにせよ、おまえの行為は不法侵入だし、こいつの刃渡りだと銃刀法違反も追加だ。警

察には行ってもらうからな？　まあ、軽い罪さ」

栗野はがっくりと肩を垂れ、小さく頷いた。

「なにをしている。さつさとガキを殺してデータを持ち帰れ！」

その声は、薄暗い書斎にやけに大きく響いた。青豹のリーダー、柳浦征夫は受話器やなぎうつら ゆきおを握る右手に不必要な力を加えた。

『申し訳ありません。栗野は坂丘高校のSDFに保護されました。』

ドアを破壊し次第、われわれも校舎に突入します』

「もういい、これから”狼”の数人を向かわせる。到着次第、彼らの指揮下に入れ」

『は、”狼”！？　いえ、警備に就いている高校生は少数です、われわれだけでも充分……』

「きみにはまだ伝えていなかったな。盗られたデータは人事についてのものだが、暗号ファイルで別のデータが隠してある。青豹の根幹が揺らぐような重大情報がな」

『はあ……なるほど』

「高校にいる学生を抹殺してでも持ち帰れ。いいな」

『分かりました』

柳浦は、相手の返答を聞き終えずに受話器を耳から離し、通話を終えた。

書斎の入口で控えている部下に丸い顔を向ける。

「 ”狼” から三人を選抜して坂丘高校に向かわせる。手段は任意、なにをしてもデータを奪還させる」

「はい」 部下は静かに書斎から出て行った。

青豹の暗殺部隊、 ”狼”。身寄りのない子供に高度な殺人術を叩き込んで組織した、殺人マシンの集団。

これで、事件は解決したも同然だ。柳浦は白髪混じりの頭を掻いてから、本革のソファにどっかりと腰を沈め、口の端を吊り上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9680q/>

---

高校内乱

2011年10月9日16時51分発行